

# 11 アナロジー

経済的に思考する

文章作成の技法として「比喩を用いて一撃で仕とめよ」というアドバイスをあります。比喩によって、読み手は文章内容を一瞬のうちに深く把握できるのです。このように比喩は、速く、深く理解するのに有効であり、経済的な思考様式だと言えます。ここでは比喩やアナロジーのメカニズムについて見ていきましょう。

## 直喩と隠喩

アナロジーは類推と同義語です。そして、比喩はアナロジーによって生成されます<sup>1</sup>。比喩は主語と述語で構成され、いろいろな形式を取りうるのですが、もともと単純なのは「○は××に似ている」「○は××のようだ」あるいは「○は××だ」といったものです<sup>2</sup>。前者のように比喩指標（に似ている、のようだ、みたいだ）を明示的にもつ表現を直喩（シマリー）、もたない表現を隠喩（メタファー）と言います。隠喩は直喩の省略形です。直喩の表現で「○は××に似ている」という形式があることから明らかなように、比喩の理解は土台の部分で類似性判断のメカニズムに支えられています。

## 類似性判断のメカニズム

多次元尺度構成法や因子分析法を利用すれば、心理的な類似性空間内で○○と××の間の

距離を求めることができます。○○から××までの距離は、××から○○までの距離と一致するのが普通です。これを距離の対称性と言います。ところが、人間が行なう類似性判断はいつも対称性が保証されているわけではありません。「カナダは米国に似ている」という表現はあまり変ではないのに「米国はカナダに似ている」というのは奇異に感じるといふ現象があります。これは、○○と××が似ている程度と、××と○○が似ている程度で、違いが見られる例です。

類似性判断の非対称性に関して、トヴァスキールらの特徴比較モデルによる説明が有名です<sup>3</sup>。このモデルを大幅に単純化して紹介してみましょう。たとえば、カナダや米国などについて何らかの知識をもっているとして、両国の類似性判断の場面で利用される知識は、図11-1に示すように「カナダの特徴集合」と「米国の特徴集合」で表現できます。

カナダの特徴集合は「カナダの独自性」+「両国の共通性」で、米国の特徴集合は「米国の独自性」+「両国の共通性」でそれぞれ構成されています（以下、「両国の共通性」は単に「共通性」と呼びます）。「共通性」、「主語の独自性」、「述語の独自性」のそれぞれに対して、類似性判断のプロセスで注意が向けられる程度を $\theta$ 、 $\alpha$ 、 $\beta$ という重みづけで表現すれば、次のようになります<sup>4</sup>。

「カナダは米国に似ている」程度

$$\parallel \theta \text{ (共通性)} - \alpha \text{ (カナダの独自性)} - \beta \text{ (米国の独自性)} \dots \text{①}$$

「米国はカナダに似ている」程度

$$\parallel \theta \text{ (共通性)} - \alpha \text{ (米国の独自性)} - \beta \text{ (カナダの独自性)} \dots \text{②}$$

3 トヴァスキール(1977)

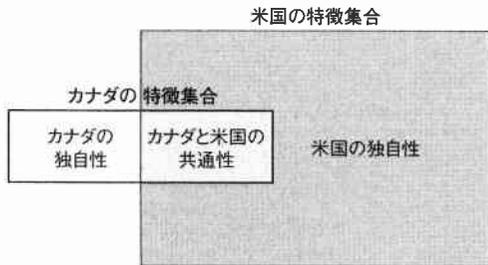


図11-1 カナダと米国の特徴集合

では「○○」が主題、「××」が喩辞。比喩は主題と喩辞の間に類似性や共通点を見いだすことで、その意味が理解される言語表現です。言葉遊びのなかに「寄席の大喜利などで「○○とかけ××とく。そのんはー」という「なぞかけ遊び」があります。これもアナロジーの一種です。

1 ある国語辞典によると、類推は「類似点に基づき他のことをおしはかること。2つの特殊的事例が本質的な点において一致することから、他の属性に關しても類似が存在すると推論すること。似たところをもととして他のことも同じだろうと考えること。類比推理。」と説明されています。比喩については「物事の説明に、これと類似したものを借りて表現すること。たとえば。」となっています。

2 たとえられる側を「主題（トピック）あるいはターゲット」、たとえる側を「喩辞（ビークル）あるいはベイス」と呼びます。「○は××だ」

①式と②式の差を求めると

「カナダは米国に似ている」程度Ⅰ「米国はカナダに似ている」程度Ⅱ  
 (α-β) (米国の独自性)Ⅰ(カナダの独自性)Ⅱ ∴ ③

ここで③式の右辺(Ⅱの後ろ)に注目してみましょう。一般的に、米国のことはよく知られているけれどもカナダについてはあまり知られていないと思います。そのため、カナダの独自特徴に比べて、米国の独自特徴のほうが頭に浮かびやすいでしょう。その場合、「米国の独自性」√「カナダの独自性」(非負)となります。また、類似性判断のプロセスにおいては、文の述部よりも主部に注意が向くと仮定すると、α√β(非負)となります。

以上より③式の右辺はプラスになり、「カナダは米国に似ている」程度Ⅰ「米国はカナダに似ている」程度√0が導かれます。このような計算が心の中で行なわれ、「カナダは米国に似ている」程度が「米国はカナダに似ている」程度よりも高いと判断されるのです<sup>5)</sup>。

比喩理解のモデル

最近、文理解のメカニズムに着目して比喩を捉えようとする**カテゴリ包摂モデル**が提唱されています<sup>6)</sup>。比喩文「笑顔は花だ」の形式は、カテゴリ叙述文「イヌは動物だ」の形式と同じです。ここでの叙述文はイヌが動物カテゴリに属することを述べているだけであり、比喩文も笑顔が花カテゴリに含まれると述べているに過ぎません。ただし、比喩文

は**アドホック・カテゴリ**を心の中に産み出す点で叙述文とは区分されます。アドホック・カテゴリとは、目的や文脈に応じて、臨機応変にその場で生成されるその場や状況固有のカテゴリのことです<sup>7)</sup>。

カテゴリ包摂モデルでは、比喩文「笑顔は花だ」を理解するプロセスを次のように説明します。①述語がもつ意味特徴の一部が選択され、本来の意味特徴よりも抽象的なレベルに変容される。つまり、述語「花」は「美しい色の花びらがある、カラフルである、そのうち枯れる」などの意味特徴をもつので、それらの意味特徴をさらに広い範囲に適用可能な意味特徴へと抽象化して「美しい、華やかな、永遠ではない」というように変容させる。②その抽象化された意味特徴を有するメンバーが集まってアドホック・カテゴリが生成される。

③このアドホック・カテゴリの意味特徴を主語に重ね合わせて、主語と述語の間の類似性や共通性を必要に応じて掘り起こし、比喩文の理解が完了する。「美しい、華やかな、永遠ではない」といったアドホック・カテゴリの意味特徴を主語「笑顔」に重ね合わせて、「笑顔は美しい、華やか、永遠ではない」といった理解がなされる。

このモデルは、特徴集合の変容や生成のメカニズムを重視しています。その点が特徴比較モデルとは異なっています。

アナロジーや比喩は、主語と述語の間で新たな共通点を発見する働きをもつことから、**創造的思考**にも結びつくというメリットがあります。しかし、ある側面だけを強調し、ほかの側面を隠すという**バイアス効果**も有することに注意する必要があります。

4 トヴァアスキーらは、共通性を共有特徴、独自性を示差特徴と呼びます。これは言語学の用語を借用したものです。

5 図11-1を使えば、類似性判断の非対称性に関して次のような説明もできます。「カナダの特徴集合」に占める「米国らしさ」(共通性)の割合は、この図では、約50%に達します。一方「米国の特徴集合」における「カナダらしさ」(共通性)の割合は10%にも満たない状況です。「カナダの米国らしさ」は、「米国のカナダらしさ」よりも高いのです。この影響により、「カナダは米国に似ている」という表現のほうが「米国はカナダに似ている」という表現よりもしつくりくるのだと考えられます。

6 「クラス包摂モデル」が正確な呼び方ですが、ここでは「カテゴリ包摂モデル」とします。

7 たとえば、「火事の時に持って逃げるもの」など。「10プロトタイプ効果」参照。

●参考書  
 川崎恵里子編著(2005)『ことばの実験室——心理言語学へのアプローチ』ブレイン出版